鉄柵に門扉がついた

2012年11月27日

土などの重量物を、丘の北側の長い坂で運び上げるのがたいへんなので、よく裏の鉄柵をはずして運び上げていた。そこは「勝手口」と呼ばれていた。

夏の終わり、「勝手口」が総務課の人に見つかり、溶接して閉じると叱られた。この裏ルートが断たれると授業存続も困難になる。「では、つちのいえ辞めます」と答えたら、なんと門扉をつけていただけることになった。

鉄柵をはずして通る小清水漸先生（2009年7月9日）

「勝手口」から土嚢を運びあげる（2010年5月13日）

井上がアフリカ滞在中に門扉のカタログがメールで届いた。遠慮がちに「小さく目立たない門で結構です」と返信した。2012年11月27日、門がついた。非合法が合法化された記念日。

キツネのイラストレーターです。人間は辞めました。

藤村佳朋（竹藤狐）

2012年度からつちのいえ参加。
2014年構想設計専攻卒業。
瀬戸内海の離島で絵を描いたり、着ぐるみを作ったり、イベントを主催したりしています。
https://takefuji-fox.jp

10年前に京芸に入学し「つちのいえ」をはじめとした井上先生のほぼ全ての授業を履修しました。現在は瀬戸内海の離島に移住しイラスト・デザインや地域振興の仕事をしています。島は瀬戸内国際芸術祭の会場になっており、それに関連した壁画制作を行っています。また、冬の閑散期を活用した着ぐるみ交流イベント「獣ヶ島（けもがしま）」の開催・運営を行っています。

「つちのいえ」では現代美術の文脈にとらわれない、素材やコンセプトに対する基本的な向き合い方を学ぶ事ができました。卒業後は「アートで地域おこし」を行う企画会社に就職し、そこで携わった様々なプロジェクトを理解するのに「つちのいえ」での経験は大いに役立ちました。例えば、畑の草刈り後の草を押し固めた「畑の肥料に還っていく彫刻作品」のプロジェクトがあったのですが、「つちのいえ」での経験のお陰でこの作品のコンセプトや評価されている理由を即座に理解出来ました。島に移住した現在でもこれらの経験が役立っています。

獣ヶ島集合写真　冬の離島の閑散期を利用して「趣味で着ぐるみ」をされている方の撮影・交流イベント「獣ヶ島（けもがしま）」を開催しています。閑散期の宿や観光施設を活用し、島の経済を回す事を目指しています。

高松花市場壁画　高松中央卸売市場からの依頼で制作した壁画です。全長約20mほどあります。
「花言葉」をモチーフにした絵巻物仕立ての壁画になっており、通行人が楽しみながら香川県内で栽培されている花について知る事ができます。

壁画を描く

2013年前期

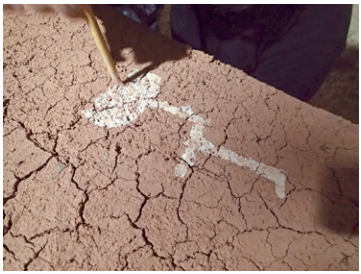
2013年4〜5月、内壁・外壁の土の上塗りを終えたのを受け、壁画制作にとりかかる。

6/13　試作のためのパネル制作・型の提案
6/20　描画実験
6/27　外壁に描く（1）
7/4　雨で作業中止
7/11　丹波マンガン記念館見学
7/18　外壁に描く（2）

試作用の土パネル：学内で拾ってきたパネルに、土の付きをよくするためドリルで細かく穴をあけ、描く北壁と同じ粘土質の赤土を塗り込む。

ブルキナファソの壁画にも使われ、陶磁器の素材でもあるカオリンをニカワで溶いて描くことに決定。

最初は何を描くか、決まっていなかった。南大樹が手づくりの型を使ってパターンを描くことを提案。

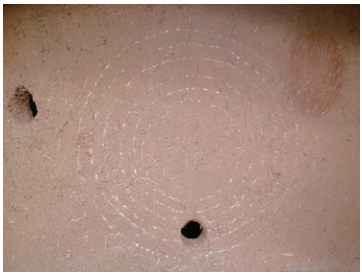


乾いた土パネルに試し描き。赤味のある土の背景に乳白色が映える。

土にじかに描くのは楽しい。意外とちゃんと定借・発色する。試し描きをしながら、描くモチーフを探る。

モチーフはつちのいえの回りにいっぱいいる生きものたちに決める。アリ地獄、ナナフシ、みみず・・・

出口義子の提案で、壁画は同心円上に描くことが決まり、竹でコンパスをつくって下絵を描く。



フレスコ画で下絵を写すのと同じ要領で、同心円に穴を空け、壁面に当たりをつけていく。

同心円の中心にはつちのいえ。回りを生きものが取り囲み、外から２番目にナナフシ、一番外に人間。

南大樹のパターンも悪くない。植物が増殖していくイメージがある。あとは見る人が想像で描く。

原点に立ち返る術

出口義子

2013年度参加
2017年大学院日本画専攻修了

農業をしている実家の畑で里芋をもぎながら親芋を中心に子芋が外へ広がり、びっしりと土に根を張る様子を眺め、当時描いた壁画のことを思い返しています。

つちのいえに参加したのは3回生の春。壁の上塗りと同時に進めたいくつかの新たなプランのうち、私は主に壁画制作に関わり、図案を提案させていただきました。先輩方の手によって美しく塗り上げられた赤い土壁を前に、緊張感を持って取り組んだことを覚えています。
図案にしたのは、つちのいえを中心に生きものが集まり同心円状に広がって行くイメージ。作業中、虫や動物に出会う度に受講生みんなで手を止めて夢中になっていた時間がアイデアのもととなりました。この先もつちのいえの周りに豊かにゆるやかに命が繋がり広がっていくように…。当時特に傾倒していた秋野不矩先生の絵に出てくるインドの砂絵や壁絵の影響もあったと思います。
人間のモチーフは、円のいちばん外側に描きました。つちのいえで活動していると様々な現象にも出会います。土壁に走るひび割れ、暑い夏が溶かす屋根、茅の穴の中に住む無数の蜂、瞬く間に緑に埋もれる丘の階段…自然にはかなわない、と肌で感じます。生きとし生けるもの、私たちを取り巻く現象を尊く思い、人間がこの世界のいちばん端っこにいることを自覚していたい、という気持ちが当時も今も変わらずあります。

下：子ども向け土絵の具ワークショップの様子（熊田悠夢さんの造形教室と出口の絵画教室が合同開催）

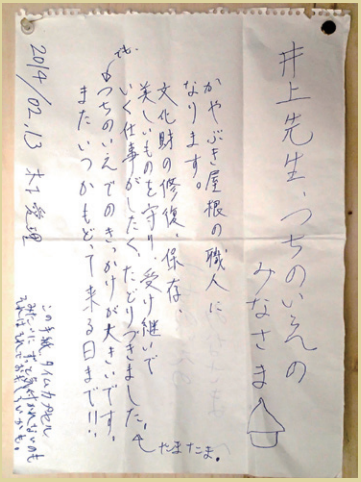
月日を経て、雨風に晒され風化しながらつちのいえのある景色を見守るような存在であってほしいと思っています。

現在私は日本画の制作をしつつ、子どもに絵を描く場を提供しています。小さな子どもたちの手はまるでひとつの生きもののように自由に動き、絵筆を走らせます。つちのいえに参加し、頭からではなく手でつくることから始めれば新しいものが見えてくる、ということを経験しましたが、今また改めて子どもたちの姿からその大切さを実感させられているところです。
この世界を見つめ、つくる原点に立ち返る術を、この先もずっとつちのいえで過ごした時間が示してくれることと思います。

ついつい長くなる話

木下愛理（荒 愛理）

2012年 美術学部陶磁器専攻卒業
2014年 宮城県石巻市の茅葺き会社に就職
2018年 山形県へ移住。武者修行を始める。
2020年現在、茅葺き職人と主婦を兼業。



木下愛理の置き手紙（2014年2月に発見）

つちのいえのメンバーだった先輩が帰ってくると、なんかええ顔だった。私は制作のことばかり考えていると、鬱屈して100%楽しめていなかった。つちのいえは、やりながら考えるという、とりあえずやってみる感と、ちょっとアングラな雰囲気にそそられるものがあった。参加したいに決まってる！

綺麗じゃない、新くもない、言うたら何もない、それが京都芸大の誇るべきところ。ケチつけてる訳とちゃいます。そこから創造する力がめっちゃ強いということです。無い物には替わりになる物への閃きや、有る物で活かすという臨機応変力は、この大学、さらにつちのいえでは最高に学べた。特別アイデアマンでなくても、そこに居れば自然と身についていく。

そして忘れもしない、忍耐も確実に鍛えられた。一番寒かった年末、悴む指で竹小舞を編んだ思い出。メンバーで暖かい鍋を囲むのが楽しみで、ひたすら編んだ。東北で、寒い！と感じる事は当然あるが、あの時の寒さに比べれば…！

述べてきた事は、職人の世界ではそれが出来て当たり前で、さらに上をいってると思う。当時茅葺きを指導して下さった斎藤親方にも聞いてみたい。お会い出来ることが叶えば、学生の時には思い付きもしなかった質問が、今だからこそ山程ある。

一人前にはまだまだだが、どうして茅葺きの道に？と聞かれれば、必ずつちのいえの話をする。これはちょっと威張れる。

2019年12月29日、山形からやって来て、つちのいえの傷んだ屋根を修復してくれる茅葺き職人・木下愛理。ガンギなど道具も自前。